

「いらっしやいませ」

「クリーニングをお願いします」と言って、カウンターに洗濯物を乗せた。

「当店のご利用は初めてですか？」

「はい、そうです」

「ではお名前とご連絡先をお願いします」

「カンノです。電話が五二一―九二八五です」

「カンノ様の漢字は、くさかんむりの『菅』に野原の『野』でよろしいですか？」

「いいえ、神様の『神』に野原の『野』になります」

「はい、わかりました・・・」店員は早速受付票に神野の名前を記入して、洗濯物の仕分けを始めた。

「スカートが二枚、こちらはドライクリーニングのスタンダードコース、カシミヤのセーターが一点、こちらはエクセレントコースになります。ワイシャツが三枚、ズボンが二本、こちらはスタンダードコースです。それからダウンコートが一着ですね。こちらはエクセレントコースになります。合計九点でよろしいでしょうか？」

「はい、結構です」

店員は記入を終えると、電卓に金額を打ち込んで会計を始めた。

「ドライクリーニングの物は、明日の五時以降ならお渡しできます。エクセレントコースの物は火曜日の仕上がりになりますので」

「火曜日ですか？ もう少し早くなりませんか？」

「お急ぎでしたら、エクспレスコースにすることもできますが」

「エクспレスコースでしたらいつでもできますか？」

「金曜日の仕上がりになります」

「金曜日ですか・・・このカシミヤのセーターなんですけど、どうしても九日に着る予定にしているので、なんとかそれまでにお願いできないでしょうか？」

店員はカレンダーに目をやりながら、

「わかりました。こちらは大至急ということ、明日業者さんに話しておきます」

「お願いします。無理言つてすみません。」

「それでは神野様、お会計の方が全部で五千九百円になります」

神野は財布から五万円札と小銭を取り出して店員に渡した。

「五万九百円お預かりします。少々お待ちください」

店員はレシートと控えの用紙、それから会員カードを差し出した。

「こちらは、会員カードになります。ポイントがたまりますと、五百円の割引になります。それから、お誕生日にご来店いただきますと、すべて五十%引きになりますのでどうぞご利用下さい」

「わかりました。ではお願いします」

神野は会員カードとレシートと控えをもらって出口に向かい、

「ありがとうございました」という店員の声を背後に聞きながら店を出た。